



かわいさを

河合雅雄先生とご家族の物語を

NHKの朝の“連続テレビ小説”に

—生きとし生けるものの幸せを願った生涯—

「NHK朝ドラ」実現のため、署名にご協力ください!

丹波篠山の野山をかけめぐり、川では魚とりに夢中になって生き生きと育った少年、河合雅雄先生。一方、病弱で学校に行けない間に自宅の裏庭ではウサギを育ててつぶさに観察し、その熱中ぶりが後に世界に誇る霊長類学者・河合雅雄先生誕生の礎となりました。男ばかり6人兄弟の大家族で愛情いっぱい育てた河合雅雄先生は、ガキ大将として得たリーダーシップ、英知とユーモアを兼ね備えた温かいお人柄で、人としての魅力にあふれていました。

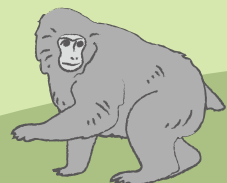
戦前、戦中、戦後の激動の時代を駆け抜け、2021年に97歳で亡くなるまで研究や執筆活動が続けられた河合雅雄先生は、人間とは何かを問いながら霊長類学の枠を超え、人と自然との共生、命のつながりと共生の尊さを教えてくださいました。さらに、人はなぜ争うのか、現代社会から消えない戦争の根源を問い続け、生きとし生けるものへ深い愛情を注がれた河合雅雄先生の生き方や言葉は、今もなお私たちに、違いを認め合い共に生きることの幸せを示してくれています。

河合雅雄先生の人生は、共生の大切さを伝える物語です。朝の“連続テレビ小説”として放送することで、子どもから大人まで幅広い世代に、命の尊さや共生の大切さを届けることができます。現代社会が戦争や環境破壊といった困難な課題に直面する今だからこそ、霊長類学者・河合雅雄先生の生涯と教えを、違いを認め合い共に生きる幸せの象徴として、多くの人に届ける価値があります。

今の時代だからこそ、河合雅雄先生とご家族の物語を

NHKの朝の“連続テレビ小説”に

皆さまのご支援をお願いいたします。



丹波篠山市NHK朝の連続テレビ小説誘致推進協議会

(事務局：丹波篠山市観光交流部商工観光課)

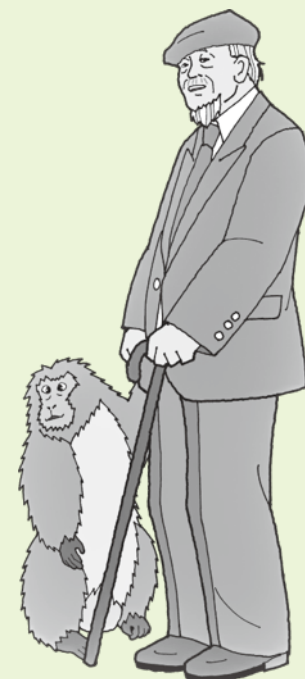
TEL 552-1111(代表) FAX 556-7021



河合雅雄先生(1924-2021)年譜



- 1924 兵庫県多紀郡篠山町(現・丹波篠山市)に誕生
- 1941 兵庫県立鳳鳴中学校卒業
- 1952 京都大学理学部動物学科卒業
- 1978 京都大学霊長類研究所所長
- 1985 日本霊長類学会初代会長
- 1987 財団法人日本モンキーセンター所長
- 1992 兵庫県教育委員
- 1995 兵庫県立人と自然の博物館館長
- 1996 兵庫県立丹波の森公苑長
- 2002 篠山市(現・丹波篠山市)名誉市民
- 2004 愛知県犬山市名誉市民
- 2007 兵庫県森林動物研究センター名誉所長
- 2015 篠山市(現・丹波篠山市)日本遺産推進協議会顧問
- 2021 丹波篠山市の自宅にて逝去 従四位



キリトリ >

河合雅雄先生とご家族の物語を

NHKの朝の“連続テレビ小説”に

—生きとし生けるものの幸せを願った生涯—

	氏 名	住 所
1		
2		
3		
4		
5		

- ※署名は、直接ご記入いただく方法とオンライン署名の2種類があります。
- ※ボールペンまたはサインペンでご記入ください。
- ※住所は都道府県名から番地まで、省略せずにご記入ください。「同上」や「//」は使用しないでください。
- ※署名用紙は厳重に保管し、NHKへの要望の目的以外に個人情報を使用することは一切ありません。



オンライン署名
はこちら

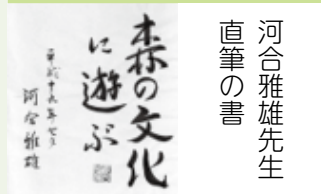
ご記入いただいた署名用紙は、FAX、郵送、または窓口(丹波篠山市役所本庁舎市民ロビー、各支所、中央図書館)にご提出ください。本用紙は複写してご使用いただくことも可能です。

セロリ

河合雅雄先生の教えが息づく／丹波篠山市の取り組み

1

丹波の森構想



1988年(昭和63年)丹波地域を一つの森と見立て、森の中で人と自然と文化が共生する「丹波の森構想」が宣言され、河合先生はその中心的な役割を担われました。

2

川づくり



少年時代と変わったところを問われ、「今は川の姿が無残になった。コンクリートで固められ実にけしからん。川は元来、いろいろな生きものの住むところだ」と憤られました。

3

里山



ウィーンの森と丹波篠山の森が相通じることを見出し、ヨーロッパの人々が自然の森の散歩を好むのと同じように、広葉樹に植え替え、四季折々美しく多様な動物や植物を育み、食の宝庫にもなって楽しめる里山づくりを提唱されました。

4

原風景のまち丹波篠山



日本中、どこへ行っても同じようなまちの姿になってしまいました。しかし、丹波篠山は城下町としてのたたずまいの美しさ、品位のある風格を持っています。あるべき姿は、日本の原風景としてのまちを維持していくことです。

5

文化



「丹波篠山デカンショ節」「丹波焼」が日本遺産に認定され、伝統的な春日能、各地域で継承する祭礼や伝統芸能、篠山藩門外不出のお苗菊など、多くの文化が今も引き継がれています。

6

農都・農業



丹波黒大豆、山の芋、丹波栗、ばたん鍋、和菓子など食文化が実に豊かです。有機農業をはじめとした自然環境や生きものに配慮した農業を一層推進していきます。

7

野生生物の保護と管理



野生動物と共生しながら、獣害対策にも取り組む「ワイルドライフ・マネジメント」を提唱され、2007年(平成19年)、兵庫県立森林動物研究センターを開設しました。

8

生物多様性



春の小川では、メダカ、フナが泳ぎ、カエルが産卵し、夏の水路では水草が花を咲かせ、ホタルが飛び交う、秋は赤トンボが乱舞し、冬には渡り鳥が飛来する。そんな自然とのふれあいを大切にされました。

マトヘヤ 万兎の部屋

河合雅雄先生の功績や数々の著書、実際に使用されていた愛用品を丹波篠山市民センター図書コーナー内に展示しています。

自然保護や野生動物との共生、歴史文化を活かすまちづくりなど、河合先生の教えが息づく丹波篠山市の取り組みを紹介しています。

この名称は、河合雅雄先生が子どものころに兄弟で呼びあっていた愛称が「マト」であり、また児童文学者としてのペンネームが「草山万兎(くさやままと)」であったことが由来となっています。



河合雅雄先生の生き様から 現代課題を解決する知恵を学ぶ

ふるさと-人と自然との共生-

自然の中でたくさんの生きものとふれあって生き生きと育った一方、病弱で長く床に伏せることも多くあったため、自然と本の世界に親しみ、丹波篠山の森や生きものへの興味を深めるきっかけとなりました。自然の中で命のつながりを感じた体験が、後の研究と思想の原点となりました。丹波篠山の自然を愛し、人と自然が共に生きる大切さを生涯伝え続け、その精神は今もまちづくりに息づいています。

家族-互いを認め合う優しさ-

河合家は、子どもの個性を尊重し、6人兄弟を比較せず公平に見守る家庭でした。成績の違いを責めず、互いを認め合う親の姿勢が、兄弟の信頼と絆を深めました。そうした家庭の愛情と教育方針が、人間を信じる心を育て、のちの河合先生の温かく優しいお人柄、人間観や教育観の基盤となりました。弟の心理学者・河合隼雄先生もユング研究の第一人者、文化庁長官として偉大な功績を残されました。

人と人の共生-サル学へ-

戦争を経験した河合青年は、焼け跡の時代に「なぜ人間は争うのか」と深く考えました。その答えを求めて彼が選んだのは、最も人間に近いサルの研究でした。サルの社会を通じて、人と人との共生、人間の本質と平和の可能性を探ろうとしたのが、彼の「サル学」でした。サルにも文化があるー「サルのイモ洗い文化」の発見は、世界で河合雅雄先生の名を一躍有名にしました。

ユーモア-児童文学の名著-

アフリカのフィールドでの研究は決して容易ではなく、風土病に苦しみ、失敗や孤独にも直面しました。それでも河合先生は、どんな困難もユーモアで笑い飛ばしながら乗り越えました。仲間や家族との温かい絆が、彼を支え続けました。そのような生涯を通して、子どもたちの心に寄り添い、全ての生きものに温かいまなざしを注ぐ児童文学の名著を数多く残されました。

テーマは 「共に生きる・共生」

河合先生はすべての命のつながりと共生の尊さを説きました。今、世界では、地球環境が破壊され、野生生物は絶滅の危機にあり、分断と戦争が絶えません。そんな現代社会に心を痛め、河合先生は、自然と人、人と人が共に生きることこそ幸せがあると訴え続けられました。この河合先生の教え「生きとし生けるものを等しく尊び、共に生きる心」から、私たちの幸せが見えてくるのではないのでしょうか。

